



人権教育を柱に、学校・保護者・地域で学力向上運動を展開

松原市立布忍小学校・松原第三中学校の視察より

5月28・29日に行なった、大阪府松原市の学校視察について以下にご報告します。

1960年代後半の越境問題、不就学問題を背景に、学校の荒廃が進んだ。それに立ち向かった、学校・保護者・地域の活動の歴史がそこにはあった。「低学力と非行の克服」を教育課題として、教師が一丸となり、保護者の協力を仰ぎながら、「学校の再生」と「どの子ども大切に、学力を伸ばす」取り組みを展開してきたのは両校に共通していた。学校運営の重点課題として、(1)集団づくり、(2)人権カリキュラム、(3)低学力の克服と学力向上、(4)保護者・地域との連携、に学校が腹を据えて取り組んでいる様子が分かった。

布忍小学校では、算数と国語を学力向上の中心にすえ、共通課題として「論理的に表現する力」の育成に取り組んでいた。算数では、「問題解決の見通しを持つ力、考える力」を言語活動を通じて育てることを課題としていた。また、診断テストによる実態把握と授業の中に個別指導の時間を取り入れ、子どもの学びが着実に進んでいくようなシステムを構築していた。圧巻なのは、保護者の協力の下、徹底した家庭学習で学習指導を展開していることだ。宿題は、毎日学年共通のものを出し、必ず教師が目を通し、間違い直しはその日のうちにするよう昼休みや放課後を個人指導の時間にあてている。家庭環境が整わない生徒については、家庭訪問指導をするということもある。加えて、先生方の研修体制と小学校間、中学校との連携によって地域の子どもたちを、学校を中心に地域ぐるみで育てようとする熱意に感動を覚えた。

松原第三中学校でも、小学校の指導を継続する形で、同様の学力向上の取り組みが行われていた。放課後、数学・英語を中心に指名された生徒が自主学習に取り組んでいる姿に、学校の指導方針が、生徒一人一人に浸透し、成果をあげていると感じた。算数・数学科では、両校ともに習得学習ノートを作成し、「授業（一斉→個別→一斉）⇒宿題（復習）⇒予習（中学のみ）」の学習サイクルを、生徒自身がスムーズに実現できるよう工夫していた。（写真A、B）この学習ノートの扱いはおおいに参考になると思われた。

「スーパー教師がいるわけではなく、先生方がみんなで力をあわせてやっている。先生方は大変なことにもめげずみんなイキイキと仕事をされている。先生方の熱意に支えられてここまでできました」という教頭先生の言葉が印象に残った。

今回の視察では、小・中の一貫したカリキュラムの成果と地域をあげての取り組みに大きな可能性を感じました。飯山地区では、今後の地域社会の維持発展のためにも、将来を担う子どもたちの学力向上の意義と重要性を、教師・保護者・生徒・地域が共通認識し、学力向上のための①地域づくり（地域・保護者からの支援体制）、②小・中・高の学校間を超えた組織づくり、③カリキュラムづくりを進めていくことが必要だと感じています。この大きな課題に向かって、IC委員会の役割の重さを改めて実感した学校視察でした。



写真A



写真B

飯山北高と飯山二中の数学の授業を互いに参観

飯山北高の数学科と飯山第二中学校の交流を深めようと、6月6日(金)と6月20日(金)に、互いに授業参観を行いました。

二中では、3年生の習熟度別の授業がおこなわれており、それぞれの先生の持ち味を活かしながら、生徒の学びを大切に授業をしている様子うかがえました。生徒もイキイキと授業に取り組んでいて好感が持てました。教室の後ろに、上・中・初級の3段階別の宿題プリントが用意されていて、生徒はどのレベルの問題をやっても良い仕組みになっていました。近年、市内のどの中学2・3年でも、少人数の習熟度講座で数学の授業をおこなっているということも分かりました。高校の数学にギャップを感じるのには、内容に対してだけでなく、40人の一斉授業に対してもあるのかもしれない。



教育評価・学力評価に関する研修会実施



去る6月9日(月)に、常磐大学の中村洋一准教授(左の写真)をお招きして、学力評価・教育評価について講習会を行いました。中村先生は、かつて飯山北高の英語の教師としての経歴もあり、飯山に縁がある方で、飯山地域の学力向上に対して関心をもたれています。世界的な学力調査にも関わられたということで、今後も飯山カリキュラムの研究にご協力をいただくことになりました。

先生からは、「数学でどんな力をつけさせたいのか」を問う出口テスト作る意義について教えていただくとともに、学力向上のためには、まず、この地域の子どもたちが、何ができて何ができないのかを明確にし、そして、指導の不足箇所を補うための教材を開発していくことから始めるのが良いと助言していただきました。